

第4回 ユースエコクラブシンポジウム

~Captains of Environment~

実施報告書

※ この事業は、東洋ゴムグループ環境保護基金の助成を受け実施しました。

※ この報告書は、当会のホームページでもご覧いただけます。

開催日時 平成27年2月15日(日) 10:00~15:00

開催場所 エコハウス138

主催 NPOエコバンク Japan

協力 こどもエコクラブ全国事務局(公益財団法人日本環境協会内)

参加 参加者 15名
有識者 2名
こどもエコクラブ全国事務局職員 1名
当会会員 2名

保険 年間を通じ、以下の団体保険に加入

引受会社 富士火災海上保険株式会社

契約内容	対人賠償	1事故あたり	限度額	10億円
		1人あたり	限度額	3億円
	財物賠償	1事故あたり	限度額	3億円

当事業期間中の保険契約内容

国内旅行傷害保険	死亡・後遺障害	1人あたり	1千万円
	入院保険金		4500円
	通院保険金		3000円
	個人賠償		5千万円

シンポジウム開催までの経緯

- 4月 助成金の内定を受け、準備を開始。
- 7月 昨年の参加者で今年の参加予定者には、テーマに関連した資料や視野を広げるために役立つと思われる学習資料を、当会から毎月末に送付する。同時に昨年の課題を含めて今年のテーマについて取り組みを開始する。テーマごとのメーリングリストやLine(SNS)を利用し、シンポジウム開催まで意見の構築を進める。
- 9月 協力申請その他の準備を終える。日本環境協会のご協力を得て、参加者募集の書類を送付する。
- 1月 最終的な参加者を決定。テーマごとのメーリングリスト、LINE(SNS)による話合いに加わり、議論を進める。
- 2月 シンポジウム開催

【活動内容】

- 10:00 集合
簡単な挨拶後、シンポジウム開始
当日までに準備した内容で、中間発表を行う。
- 「環境ビジネス」・・・発表後の講評で、議論の不足しているとみられる箇所の指摘をいただき、午後の本発表にむけて議論を深める。
 - 「エネルギー」・・・学業上の事由により発表者が来場できないため、発表は午後3時にスカイプによる電話会議形式で行う。
 - 「まちづくり」・・・就職活動の都合上発表者が当日参加できないため、後日紙面発表という形で発表資料を提出してもらって他の参加者に配布し、意見交換・質疑応答を事務局が取りまとめ、発表終了とした。
 - 「生物多様性」・・・シンポジウム直前に、発表者が体調不良のため発表資料の作成が困難となり、当日も欠席。後日紙面発表の形で発表資料を提出、意見交換・質疑応答を事務局が取りまとめる予定であったが、体調が回復せず発表は保留。

参加者が午後の発表にむけ準備している間、こどもエコクラブ全国事務局の職員、有識者と当会会員で今後のこどもエコクラブのあり方についての意見交換を行った。

当事業は、こどもエコクラブを成長段階により3つの時期（未就学児童、小学生、中学生以上大学院生まで）に分けたうちの最終段階の活動を支援するために開催しており、この段階でこどもエコクラブ活動は終了することになる。当事業の参加者はこどもエコクラブ導入時期から継続して活動を行ってきており、初めての卒業生となる世代である。

現在こどもエコクラブ活動の中心は小学生であり、最終段階まで活動を継続するこどもは、きわめて少数であるのが実情である。当行事への参加状況からも明らかのように、中学生以上のこども達がこどもエコクラブ活動を行っていくには、日頃の学業やクラブ活動、受験や進学・就職活動などと両立させていくうえで、積極的な意思を持ち続ける必要があり、事務局、有識者、当会関係者はそれをいかにサポートしていくかに腐心している。

こどもエコクラブ導入から15年以上経過し、社会や人々の環境に対する取り組み方が変化してきた現在は、改めてこどもエコクラブの存在意義を問う時期であり、こどもエコクラブの今後の発展のため、この機を逃さず今後の方向性を明確に示すことが喫緊の課題であることを確認した。最終的に全国事務局への「こどもエコクラブ発展のための提言書」を取りまとめた。

- 12:00 昼食
参加者、職員、有識者、当会会員が交流を深めながら昼食を共にした。

- 13:00 参加者は、発表にむけた準備。

- 14:00 発表
「環境ニュービジネス」～身近な環境問題を解決しよう～

消費者の環境に対する意識が低下していることが問題であり、その原因には次の二つのことがあげられるのではないか。

①環境について考えることより経済回復を優先すべきという人や、原子力発電所問題を気にする人が増えた。

②個人で行う環境対策に限界を感じている。

では、意識を高めるために何をすべきか？

環境に関心のある人々が自由に交流できる場を設ければ、知恵を出し合い、対策が個人にとどまらず、広がりを持ち大きな影響を与えられるのではないか。

その具体的な形として・・・

人々が交流できるカフェ&バーを開設

環境ビジネスが扱うものには、情報、商品、場所が考えられる。

情報については第3回シンポジウムで扱ったので、今回のカフェ&バーでは交流の場所を提供できる解決法を考える。

- ・一般のカフェ&バーのように雰囲気を楽しむのを目的とするのではなく、環境について関心を持ち、情報共有することに積極的な人々をターゲット層とする。
- ・公共の交流施設では制約のあるアルコール類の提供、開設時間などを考慮する。

まとめ

現在の環境ビジネスは、高度な技術力を持っていたり資金的に余裕のある大企業か、あるいはインフラ的側面からは公共団体が主に行っている。市場規模は年々成長しているが、技術面でも資金面でも障壁が高いことが分かった。

様々な業種や背景を持つ人の交流によって新しいアイデアが出て、それを実現するためには、十分な経営資源を持たない小規模な企業でも環境対策事業を行えるようベンチャーキャピタルなどの整備が課題である。

<講評>

- ・ビジネスである以上、収益を上げるためには何を提供するかを明確にすることが大切。
- ・収益構造の中に「成功した事業からの寄附」が入っているが、寄附を得るためには事業の収益の堅実性、事業の成長性、社会への貢献度などが評価されるので、さらに綿密な事業計画を立てるとよい。

<発表者の感想>

- ・環境ビジネスは多方面にわたり、自由な発想ができる反面、これまでに成功したビジネスモデルが少ないため、資料や情報の収集に苦労した。

※ 有識者の指摘をいただき、後日発表資料を修正して提出。

15:00

「エネルギー」～省エネルギーとエネルギーの有効活用～

エネルギー源と利用方法をうまく組み合わせた全体の最適化を実現し、省エネルギーとエネルギー有効利用することによって、限りある供給に需要を近づけていく社会システムの構築を目指す。

そのためのアプローチは・・・エネルギー利用の地域化と分散化

- ・排熱の利用、再生エネルギーの利用、それらを都市インフラに組み込ん

だスマートグリッド・スマートコミュニティの確立と普及。前述の項目の実現を支援するための持続可能な制度の確立とそのための法整備。

現状の課題

- ・排熱利用：エネルギーロスを減らすための技術の向上、排熱処理のコスト削減、コージェネレーションの都市インフラへの組み込みを促進する必要がある。
- ・再生可能エネルギー：出力変動が大きいいため需給調整が難しい。コストがかかるので国民負担が増える。
- ・スマートコミュニティ：初期投資コストが高い。

まとめ

これまでエネルギーの供給サイドからの対策が考えられてきたが、持続可能な社会の構築のためには、限りある供給に需要を近づけていくことが必要で、それを達成するためにエネルギー利用の地域化と分散化を柱に、エネルギー源と利用法を組み合わせた全体最適化が主張されている。具体的な方法論としてのスマートグリッド・スマートコミュニティの普及、それを支えるためにインフラ整備、制度や法の整備が欠かせない。

<講評>

- ・エネルギー問題は国のエネルギー政策と密接に関わっており、国ごとに状況が異なり、また一国においても状況により変化していくことからわかるように、簡単に自分で答えを出せる問題ではない。しかし現状をきちんと把握することは重要であり、よく整理されている。現状をまとめただうえで、自分はこういう視点でフォローしようとするのが大切である。
- ・議論を進めるうえで根拠資料をすべて提示する必要はないが、質問に答える場合や反論を想定して公表されている数値資料や政策資料などを提示できるように準備しておくことは必要である。
- ・今回は、前2回の「供給」「転換・発電」の議論に続く「需要」から見た内容であったが、広がりのあるエネルギー問題のうちでポイントを絞ったのはよかった。今後は、資源を持つ国と持たざる国という視点、安全保障の視点など別の視点でも考えてみるとよい。

※ 有識者の指摘をいただき、後日発表資料を修正して提出。

15 : 45 終了

【成果】

参加者の交通費や距離的・時間的負担を減らすために、PC環境を整えたり多様な通信手段を活用する環境を整えた。その結果、参加者の地理的な制約にかかわらず話し合いをすることができ、対面で行う議論と同等の議論が行える形式が可能になった。

単発の行事では実現が難しいと思われるが、このシンポジウム参加者は数年をかけて同じテーマに取り組むことで、じっくり議論を深めることができた。

参加者は正しい答えがある問題に取り組むのではなく、「テーマを自分で選び、問題点を見つけ、自分なりの解決を見出す」という難しい課題に直面し、努力し奮闘して結果に

結び付けることができた。今後この経験を活かしてくれることを期待する。

【今後の課題】

通信手段が多様化したことと機器環境が整ったことで、事前の情報や資料の収集がしやすくなったり、グループ内での議論が進めやすくなったりして、シンポジウム当日に会場で議論して資料をまとめて発表するための時間が少なくて済むようになった。とはいえ、これまで1泊2日をかけて行ってきた当シンポジウムであるが、今年度は1日の日程であったため、中間発表後議論を構築し直す時間が十分に取れなかったのが残念であり、議論を深めるためには当日にも十分な時間をとるべきであろう。

またシンポジウムの開催日が、参加者の中心となる学生たちの学期末試験・卒業・進学・就職の準備時期に当たるため、あらためて開催時期の選定が課題として浮かび上がった。比較的時間がとりやすい夏季休暇の時期の開催が望ましいが、助成決定後の準備期間が十分でないため実現が難しく検討が必要である。